

自尊感情と身体的自己概念の関係性について

—— ボトムアップモデルとトップダウンモデル ——

袁 内 豊

- 目 次
- I. はじめに
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察
- V. まとめ

I. はじめに

自尊感情と自己概念

自尊感情とは、「自分自身を尊重し、価値があると感じること」である。しかし、自尊感情の定義は様々なものがあり、研究者によってその定義は若干異なる。James(1890)は自尊感情を「成功/願望」と定義している。この考え方によると、成功が大きいほど自尊感情は高まるが、その一方で、同じ成功でも願望が大きくなれば自尊感情は低下することになる。また、榎本(1998)によると、「他者との比較ではなく、自己のもつ価値基準に照らした自己評価」としており、自己の評価基準が基本になっていることがわかる。

自尊感情の高低と学業成績、原因帰属の仕方、不安、抑うつなどとの関係性を調べた調査結果では、自尊感情が高い人は、自尊感情が低い人と比較して望ましい行動や思考をすることが多く、不適応行動は少ない傾向にある。このようなことから西欧では、意図的に自尊感情を高めようとする働きかけが行われた。しかしながら、このような働きかけに対

する詳細な分析によれば、因果関係が不明瞭であったり、十分な成果が現れていないという報告も少なくない。

一方、自己概念とは、「自分自身についての知覚の体制化されたもの」(榎本, 1998)とされている。基本的には自己概念には評価的側面を含まない。この自己概念と自尊感情の関係について、榎本(1998)は「自己に関する記述的側面が自己概念であり、そのような記述的側面に対して評価的色彩を帯びたものが自己評価と自尊感情である」と述べている。この両者の関係について例を示して説明すると、「自分の身体は細い」という自分の身体に関する知覚がある。これ自体は評価を伴わない記述的側面なので自己概念となる。この「自分の身体は細い」という自己概念に対して、「理想の体型だ」という評価・感情を加えることで、自己評価、あるいは、自尊感情となる。この場合、「自分の身体は細い」ことは肯定的に評価されているが、同じ自己概念であっても「貧弱である」と評価された場合には否定的なものとなる(袁内ほか, 2006)。

身体的自己概念の多面的階層性モデル

Shavelson et al. (1976)の多面的階層性モデル提唱以降、様々な分野における多面的階層性モデルが考案された。その中でFox et al. (1989)は身体に関する自己概念モデルを示した。このモデルでは、自尊感情を頂点として、その下に身体に関連する領域を統括する身体全般の自己概念が存在し、さらにその

キーワード：自尊感情、身体的自己概念、多面的階層性モデル、ボトムアップ、トップダウン

下に運動、体型、筋力、体調の4つの身体に関する自己概念領域を想定したピラミッド型になっている(図1)。これまでの研究成果からこのモデルの有効性が証明されている(糞内, 2002, 2006; 内田ほか, 2003, 2007, 2008)。

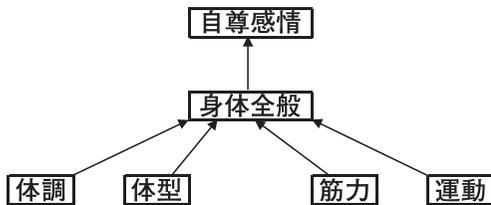


図1 Fox et al. の自尊感情と身体的自己概念の多面的階層性モデル (1989)

ボトムアップとトップダウン

自尊感情や自己概念が発達し変化するには、自分自身で体験し、その経験を知覚することが大事である。たとえば、人よりも速く走ることができたという経験が、運動に関する身体的自己概念を変化させ、そのことが身体全般の自己概念に伝わり、そして自尊感情に影響を及ぼす。このように身体的自己概念から自尊感情に影響を及ぼす過程のことを Calsyn et al. (1977) や Marsh (1990) は、自尊感情のスキル発達仮説 (skill development hypothesis of self-esteem) と呼んでいる。自尊感情を頂点として、その下に、身体的自己概念の下位尺度が広がっていくピラミッド型のモデルを考えると、下から上への伝染経路を指すので、ここでは榎本 (1998) の表現と同様に、「ボトムダウン」と表記する。

自尊感情が高い人は、社会的に望ましい行動をする傾向がある。このことは、自尊感情が行動にも影響すると考えることができる。これをピラミッド型のモデルに当てはめると、頂点の自尊感情から下位の各自己概念に影響する過程が想定される。本稿では、このような上から下への伝染経路を「トップダウン」と表現する。Calsyn et al. (1977) や Marsh

(1990) は、同様のことを自尊感情の自己高揚仮説 (self-enhancement hypothesis of self-esteem) としている。

本研究の目的

身体的自己概念と自尊感情の関係性を調査したこれまでの研究は、身体的自己概念から自尊感情への影響過程を想定したものしか考えられてこなかった。これは、自尊感情がボトムアップ状に発達・変化することが想定されていたり、Fox et al. (1989) のモデルの中で身体的自己概念から自尊感情への矢印が付いていたりすることに起因するものと考えられる。しかしながら、前述したように、自尊感情が身体的自己概念に影響するトップダウン型の過程の存在を想定することも可能であろう。そこで本研究は、自己概念と身体的自己概念の関係性について、ボトムアップ型とトップダウン型の2つのモデルを想定し、これらのモデルの有効性の検討と比較を行うことを目的とする。

II. 方法

調査対象者： 大学生626名 (男子301名, 女子325名) を対象とした。

心理的尺度：

- ① 自尊感情： 自尊感情を測定する尺度として、最も広く用いられている Rosenberg (1965) の自尊感情尺度 (日本語版) を使用した。これは10の質問項目から構成され、それぞれ4段階で回答するものである。
- ② 身体的自己概念： 自尊感情の下に位置する身体的自己概念の測定として、身体的自己概念尺度 (糞内, 2002) を用いた。身体的自己概念尺度は、身体全般、体調、体型、運動、筋力に関する質問が各々3項目、計15項目の質問から形成されている。各質問に対して、「全くあてはまらない」～「かなりあてはまる」までの4段階で回答する形式であった。

モデルの検証： これまでの研究結果から、「自尊感情」-「身体全般」-「身体に関する自己概念」が階層的な関係性を持つという基本モデルはこれまでの研究成果から既に明らかにされていた。そこで、基本モデルに基づきながら、共分散構造分析を用いて因果構造モデルの検証を行った。実際には複数のモデルについて検証し、最適なものを採択するようにした。モデルの採択には、適合度指標、モデルの解釈などを考慮した。ボトムアップモデルとトップダウンモデルについて、別々に分析を行った。なお、これらの分析は SAS 8.1 にて行った。

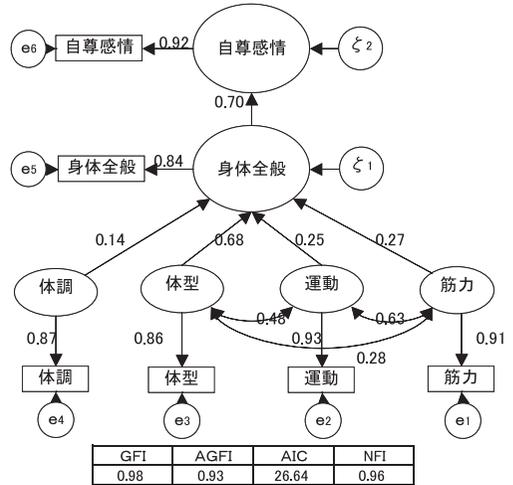


図2 「身体的自己概念」→「自尊感情」のモデルの分析結果

III. 結果

ボトムアップモデル

4つの身体的自己概念の下位概念が、身体全般に関する自己概念を通して、自尊感情に与える影響過程の因果モデルを構成し、構造方程式モデルによって検討した。

身体的自己概念の各概念（体調、体型、運動、筋力、身体全般）は、質問項目がいずれも3項目と少ないため、3項目の合計得点を一つにまとめ、信頼性にはクロンバックの α 係数を用いて算出した。

モデルの適合度を見るための指標としては、GFI, AGFI, AIC, NFIを用いた。その結果、図2のモデル (GFI=.98, AGFI=.93, AIC=26.64, NFI=.96) を採用した。図2の中に標準化された因果係数を示した。身体的自己概念の下位概念から身体全般に対するパス、身体全般から自尊感情に対するパス、これらは全て有意であった ($p < .05$)。

トップダウンモデル

自尊感情が身体全般の自己概念を通して、4つの身体的自己概念の下位概念に与える影響過程の因果モデルを構成し、構造方程式モデルによって検討した。ボトムアップモデルと

同様に、信頼性にはクロンバックの α 係数を用いて算出した。

モデルの適合度を見るための指標として、GFI, AGFI, AIC, NFIを用いた。その結果、図3のモデル (GFI=.93, AGFI=.85, AIC=97.16, NFI=.89) を採用した。図3の中に標準化された因果係数を採用した。これらの因果係数は全て有意であった ($p < .05$)。

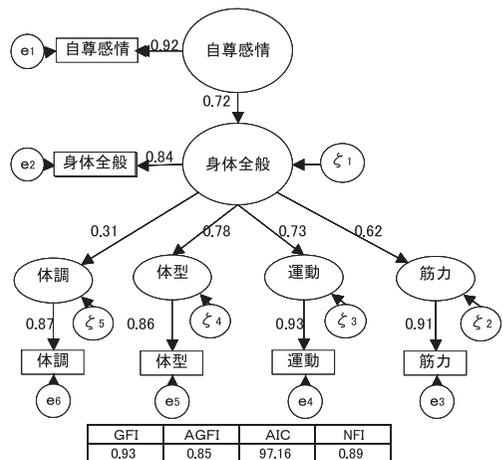


図3 「自尊概念」→「身体的自己概念」のモデルの分析結果

IV. 考 察

ボトムアップモデル

ここでは、「4つの身体的自己概念の下位概念」→「身体全般の自己概念」→「自尊感情」という因果モデルの検証を行った。分析結果から想定されたボトムアップモデルが適用できることがわかった。このような結果はFox et al. (1989)のモデルを支持するものであり、大学生を対象とした内田ほか(2007)の研究、中途身体障害者を対象とした内田ほか(2008)の研究とも共通するものであった。このことから、「体調」「体型」「運動」「筋力」の身体的自己概念は、「身体全般」の自己概念を通して、「自尊感情」に影響を及ぼすことが示唆された。

図2の中の各潜在変数間の因果係数を見ると、全体の中でも「身体全般」→「自尊感情」(.70, $p < .01$)が最も高かった。身体的自己概念の4つの下位尺度から身体全般への因果係数を見ると、体型(.68, $p < .01$)、筋力(.27, $p < .01$)、運動(.25, $p < .01$)、体調(.14, $p < .05$)の順序であった。「体型」が最も影響力があるという結果は、内田ほか(2007, 2008)と同様の結果であった(内田ほかの研究では「魅力的なからだ」と表記している)。異性に対しても、同性に対しても、自分の身体を魅力的なものとしてアピールしたい世代である大学生にとって、「体型」は身体全般、および、自尊感情に大きく影響することがわかった。

その一方で、筋力や運動から身体全般への影響力はそれほど大きなものではなく、とりわけ体調の影響力は弱いものであった。自分の健康に無頓着な世代である大学生にとって、体調についての関心は低く、そのため自尊感情への影響もごくわずかであったことがうかがえた。

トップダウンモデル

Fox et al. (1989)のモデルは、身体的自己概念から自尊感情へと矢印が付き、ボトムアップ型のモデルを想定している。他の研究においても、Fox et al.のモデルを基準としているためか、ボトムアップ型モデルの検証しか行われていない。そのためここではFox et al.のモデルとは逆方向の「自尊感情」→「身体全般の自己概念」→「4つの身体的自己概念の下位概念」という因果モデルの検証を行った。分析の結果、想定されたトップダウン型のモデルが適用できることがわかった。

図3の中の各潜在変数間の因果係数を見ると、「自尊感情」→「身体全般」(.72, $p < .01$)と強い影響力のあることがわかった。さらに身体全般から身体的自己概念の4つの下位尺度への因果係数を見ると、体型(.78, $p < .01$)、運動(.73, $p < .01$)、筋力(.62, $p < .01$)、体調(.31, $p < .01$)の順序であった。「体型」が最も影響力があるという結果は、ボトムアップモデルと同様の結果であった。また、体調への影響力は、体型、運動、筋力のそれと比較するとやや低いことがわかった。

体調と身体全般との関係性については、トップダウン型、ボトムアップ型とも低い因果係数しか得られなかった。このことは身体全般の自己概念の枠組みの中では、体調が低く位置づけされていることを指しているのかもしれない。あるいは、身体全般ではない、他の自己概念とのつながりも考えられる。女子大学生の自尊感情と身体的自己概念の関係性を重回帰分析で検証した蓑内(2002)の結果では、体調は身体全般の下に位置するのではなく、体調は自尊感情と直接的に関係していることが示唆されている。

方向性の検討

「自尊感情」-「身体全般」の因果係数を比較すると、ボトムアップ型(.70)とトップダウン型(.72)との間では大きな違いはみら

れなかった。

次に、「身体全般」－「身体の各下位概念」の因果係数をボトムアップ型とトップダウン型とで比較した場合、両者の間で大きな違いがみられた。いずれの尺度においても「身体全般」→「身体の各下位概念」（トップダウン）の影響の方が強いことが分かった。とりわけ、運動や筋力に関する因果係数において差異がみられた。

トップダウン型と比較すると、ボトムアップ型は弱い影響力しか持たないということがわかったが、このような違いは何を意味するのであろうか。まず考えられることとして、自尊感情は他からの影響は受けにくい、他の領域の自己概念には影響しやすいということである。身体に関する下位の自己概念が大きく変容しても、そのまま自尊感情に影響するわけではなく、かなり弱められながら自尊感情に伝達する。このような自尊感情は変わりにくいという結果は予想通りであった。

また、ボトムアップ型とトップダウン型とでは、異なる影響過程が存在するという事も考えられる。各領域に対する重み付けが同じであっても、自己概念を分化する場合と統合する場合とで、さらに分別して評価していることがうかがえた。

従来、自尊感情と自己概念の関係性を調べる研究はボトムアップ型を中心に行われてきた。しかし、ボトムアップ型と同様にトップダウン型のモデルも有効であったこと、ボトムアップ型とトップダウン型の影響力が異なっていたことから、ボトムアップ型とトップダウン型の両方向からの影響力について検討することが今後期待される。

VI. まとめ

本研究は、Fox et al. (1989)の身体的自己概念の多面的階層性モデルについて、トップダウン型とボトムアップ型の2つのモデルの

相違について、比較検討するのが目的であった。調査対象は大学生626名（男子301名、女子325名）であった。2つのモデルについて、共分散構造分析を行い、因果関係について調べた。その結果、両者のモデルとも有効であることがわかった。さらに、トップダウン型のモデルの方が、ボトムアップ型のモデルと比較して、影響力が強いことが分かった。これらのことから、自尊感情と自己概念の関係は、一方的な影響ではなく、両方向で影響し合うことが示唆された。

自尊感情を構成する自己概念の構造や関係性は、対象となっている人たちの関心や文化的背景の影響を受けると考えられている（養内, 2010）。この調査で対象となったのは一般の大学生であり、女性もやや多かった。ボトムアップ型で、体型が他の身体的自己概念と比較して強い影響力を持っていた理由として、このような対象者の特徴が現れた可能性もある。たとえば、体育・スポーツ系の学部学生を対象として同様の調査をした場合、運動や筋力の自己概念が強く影響することも考えられる。

調査対象によって自己概念の構造が異なることが考えられるとすれば、対象者に応じたモデルを想定し、質問項目も検討する必要がある。これらについては、今後の検討課題としたい。

引用文献

- Calsyn, R., and kenny, D. (1977) Self-Concept of Ability and Perceived Evaluations by Others: Cause or Effect of Academic Achievement? *Journal of Educational Psychology*, 69: 136-145.
- 榎本博明(1998)「自己」の心理学。サイエンス社：東京, pp.29-66, 161-201.
- Fox, K. R., and Corbin, C. B. (1989) The physical self-perception profile: Development and preliminary validation. *Journal*

- of Sport and Exercise Psychology 11 :
408-430.
- James, W. (1890) Psychology. 今田寛訳(1992)
心理学 (上). 岩波書店:東京, pp.245-301
- Marsh, H. W. (1990) Causal Ordering of
Academic Self-Concept and Academic
Achievement: A Multiwave, Longitudinal
Panel Analysis, Journal of Educational
Psychology, 82: 646-656
- 襄内豊(2002)運動・スポーツに対する自己効力
感と自尊感情の関係. 平成12~13年度科研
費成果報告書. 課題番号12870033. P57.
- 襄内豊・星野宏司(2006)高齢者運動教室参加者
の体力,身体的自己概念,自尊感情の関係.
北海道体育学研究 41: 1-7.
- 襄内豊(2010)自尊感情と他尊感情. 体育の科学60
(1): 29-32.
- Rosenberg, M. (1965) Society and the adoles-
cent self-image. Princeton University
Press: Princeton.
- Shavelson, R. J., Hubner, J. J., and Stanton,
G. C. (1976) Self-concept: validation of
construct interpretations. Review of Edu-
cational Research 46: 407-441.
- Sonstroem, R. J. (1997) Physical activity and
self-esteem. In Physical Activity & Men-
tal Health. Ed. Morgan, W. P. pp127-
143. Taylor & Francis.
- 内田若希・橋本公雄・藤永博(2003)日本語版身
体的自己知覚プロフィール-尺度の開発と
性および身体活動レベルによる性差の検討-。
スポーツ心理学研究 30(2): 27-40.
- 内田若希・橋本公雄(2005)自尊感情に関する運
動心理学的研究. 体育学研究 50(6): 613-
628.
- 内田若希・橋本公雄(2007)自尊感情の多面的階
層モデルと身体活動の関係. 健康心理学研
究 20(2): 42-51.
- 内田若希・橋本公雄・山崎将幸・永尾雄一・藤
原大樹(2008)自己概念の多面的階層モデル
の検討と運動・スポーツによる自己変容-
中途身体障害者を対象として-。スポーツ
心理学研究 35(1): 1-16.

[Abstract]

The Relationship between Self-esteem and Physical Self-concepts: Bottom-up Model and Top-down Model

Yutaka MINOUCHI

The purpose of the present study was to investigate the differences between the bottom-up type model and the top-down type model in terms of a multidimensional hierarchical model of the physical self-concept of Fox et al. (1989). Subjects were 626 university students (301 boys and 325 girls). The two hypothesized models were examined by utilizing structural covariance analysis, and the causal relation of the two models was compared. As a result, it has been understood that both models hypothesized are effective. In addition, it also appears that the influence of the top-down model is stronger compared with the bottom-up model. It is suggested that the relationship between self-esteem and physical self-concepts influence in not only one direction but both.

Key words : Self-esteem, physical self-concept, multidimensional hierarchical model,
bottom-up model, top-down model

